

パンのようなキャッチャーミットと、 諜報員となった野球選手 —— モー・バーグ

当館では、1930年代にメジャーリーグで活躍した捕手モー・バーグ（Morris “Moe” Berg）に関する資料を複数所蔵している。その中でも印象的なのが、バーグが実際に使用したキャッチャーミットである。丸くふくらんだ形状と厚く張った革は、まるで焼きたてのパンのようにも見え、現在の捕手用ミットとは大きく異なる素朴な造形をしている。革の内部に詰めものがある構造や浅いポケットは、1930年代の捕手用具の特徴をよく伝えている。

当館では夏休み期間に、野球用具の歴史を紹介する展示や解説を行うことがあり、その際にはこのバーグのミットを取り上げることが恒例となっている。近代野球の初期から現代まで、グラブがどのように進化してきたのかを紹介するうえで、この丸いミットは当時の捕手用具の姿を具体的に示す貴重な資料だからである。

バーグは1902年ニューヨークに生まれ、プリンストン大学を卒業した後、コロンビア大学でも学んだ。1923年から1939年までシカゴ・ホワイトソックスやワシントン・セネターズなどでプレーし、1934年にはベーブ・ルースらとともに日米野球のメンバーとして来日している。しかし、彼の人生は野球だけにとどまらない。1939年に現役を引退したあとの第二次世界大戦中、バーグはアメリカの戦略諜報機関OSS（戦略情報局）に所属し、ヨーロッパで科学諜報活動に従事した。ドイツの物理学者ヴェルナー・ハイゼンベルクの講演を監視する任務に就いたという逸話は有名である。

このユニークな経歴から、バーグの生涯は映画やドキュメンタリーでもたびたび取り上げられてきた。2018年にはニコラス・ダヴィドフの書籍を原作とした映画『The Catcher Was a Spy』が公開され、俳優のポール・ラッドがバーグ

を演じている。野球選手でありながら諜報活動に関わった人物として、多くの人々の関心を集めているのである。

モー・バーグは、20世紀という時代の複雑さを体現した人物といえる。当館に残るこの丸いキャッチャーミットは、1930年代の野球用具の姿を伝えると同時に、そうした彼の足跡を物語っている。

公益財団法人 野球殿堂博物館
学芸員 太田若葉



・絵葉書



・野球カード



・モリス・バーグ キャッチャーミット(年代不明)